

眠たげ少女は見逃さない

なしあじ

「ぬおおーおわったぞおー」

「荳舞^{えま}ほとんど寝てたじゃん」

「この開放感がたまらないのですよあさうえくーん」
「はいはい……」

小学生を狙う不審者の情報と、明日の二時間目の授業がクラスで人気がない授業へ変更されることが伝えられ、みんなが震撼したところで帰りのホームルームが終わった。二つの情報にざわつくクラスメイトがいる一方、音のような速さで教室を飛び出していくクラスメイト、談笑しながら掃除へと向かうクラスメイトと、教室内は三者三様となっている。

しかしどれにも当てはまらない人間もいる。それこそがわたしの幼なじみである。

^{なばら}南原 荳舞。彼女は直近の話題に興味を示すことはないものの、何かに押し出されるように教室を急いで出ていくこともしない。ただ自分のペースで、身体中の気を抜いて机に突っ伏して放課後の喜びを噛みしめるだけである。

この人間は、正常な時の流れにいろのだろうかと思う。

「荳舞早く行こうよ」

「んー、まーしばし待ちたまえくるみくーん。このあたにかさこそ味わうべきものだー……」

「別にいいけど、それならわたし先に行くよ」

「ええー、それはたいへんこまるうー」

だけれど、独特な時間軸にいる人間を振り回したり、逆に振り回されたりするわたしも、正常とは言えないのかもしれない。

そう思いつつわたしは、両手の力で荳舞の腕を引く。しかし、宣言通り荳舞はしばらく動く気がないように、びくともしない。目の前の荳舞は、持ち手のある巨大な岩のようである。生気もなくのんびりとしているから。

それでも麻上^{あさうえ} 来未^{くるみ}、諦めません。荳舞の扱いには長けているはずなので、結局すぐ動かせるはず……!!

「結局また寝るんだから……」

自信はすぐに雲散霧消。押しても引いても荳舞は動くことなく、わたしの気づかぬうちに夢の中に入ってしまったのである。

「いやあーすまんねすまんねえー。でもくるみ、あの春の陽ざしでぬくぬくな教室で惰眠をむさぼるなあだなん

て、ムチャがすぎるよー」

「授業中ならわかるけど、もう帰れるってときに眠気がやつてくるってどういうことなのさ……」

重い腰を上げた荇舞と共に、教室を出て生徒用玄関へ。途中階段から転げ落ちそうになるほど荇舞は注意散漫とした状態で歩いているのに、かなり口は回っている。眠たげな様がまるで嘘みたいだ。

誰かのせいで時間が経って、校内にはもうほとんど人は残っていないかった。たまにすれ違う先生と帰りのあいさつを交わすのみだ。だからなのか、まだ日は暮れていないはずなのに妙に物寂しい。

「ありゃー、これは降られてしまいましたなー。こまっただこまった」

「もう、これも荇舞がぐだぐだしてたからだっ」

「ごめんてばー。エマちゃんのかわいさに免じてゆギュエッ」

荇舞が満面の笑みを見せつけてきた。無性に、絶妙に、腹が立ったので両手で顔面をつぶしてみた。しかし、もともとやや童顔でモチ肌の顔をつぶしても不細工になるどころか赤ちゃんと戯れているようで愛らしかった。幼なじみとしてというより一人の女子として実に悔しい。

そんな餅を元に戻して玄関から外を眺めると、やはり明らかに小雨が降りだしていた。春真っ盛りの四月、天気が変わりやすいとは言うけれど帰り時なんてピンポイ

ントが過ぎる。ほんの少し前までは雲間から晴れ空が見えていたのに。

「仕方ない、折りたたみ傘で帰るかあ」

おもむろにカバンから折りたたみ傘を取り出す。白のドット柄のかわいいやつ。

そうしていると、荇舞がすり寄って来た。魂胆は見えている。

「ササ」

「折りたたみもないの？」

「持ち物は多くないほうがかっこいいのさー」

「なにそれ。でもまあ、しょうがないなあ」

縮まった傘を開いて、わたしのすぐ横には荇舞を並べる。もともと折りたたみ傘のサイズは大きくないが、相合傘のためさらに窮屈だ。片方の肩は多分濡れてしまう。そこまでして荇舞に世話を焼かなくていい、甘やかさなくていいと、主に荇舞のお兄さんに叱られそうではあるものの、さすがにずぶ濡れになって体調を崩されても後味が悪いため、少し我慢の道を選ぶことにした。

そしていざ外に出てみると、さらに雨足が強くなったように感じられた。本当にタイミングが悪い。何かろくでもないことが起こる前触れなのかと勘繰ってしまう。

「家まで戻るのめんどーだねえー……学校にとまりましたー」

「ほくら、キビキビ歩いてよ」

そして例によつて、荏舞はのろまだ。早く帰りたいのに、横の人間は機敏さというものを知らない。

そうしてのろまとのせめぎ合いをしながら正門とは別の東門へと歩いていく。こちらから出て行つた方が多少の近道になる。いつも使っているルートだが、今日はことさらありがたい。

そこである異変に気付く。口に出したのは荏舞が先である。

「ねーくる。あの子だれだろうー?」

「うん? ああたしかに。ちよつと小さいし……」

「一小的名札つけてるから小学生だねー」

一小とは、わたしや荏舞が通う中学の近所にある小学校のことだ。わたしたちは急にいくつか歳の離れた女の子後輩に出くわしたということになる。

もちろん、小学校はここから近所であるから小学生を見かけてもおかしなことはない。わたしが違和感を覚えたのは、その子の立ち振る舞いだ。背伸びをしたり、水しぶきもはばからずジャンプしたりと、明らかに学校の様子を伺っているようだった。

「……声、かけてみよっか」

駆け寄つて用件を聞いてみることにした。相変わらずの荏舞のペースに合わせて近づいていくと、女の子もこちらに気付いたようだった。なぜか眉間にしわを寄せら

れた。明らかに『嫌だ』のサインであるとは分かる。

近づいて見てみると、その女の子は長い髪をおさげにしている、シャツに淡い桜色のカーディガン、ひざ下のスカートと、いかにも女子小学生という感じだ。わたしも昔はこういう格好ばかりだった。

「やつほー、小学生がどうしたのだねー」

女の子に先制を仕掛けたのは荏舞だ。相手年下であることが分かると、途端に接し方が大雑把になるのが荏舞の特徴である。

そんな荏舞に女の子はどう応えるのか。見ものであったが、数秒の沈黙に包まれるだけであった。女の子は顔色ひとつ変えないままだった。

一変したのは数秒経つたときのこと。

あまりにも速い犯行に、女の子は及んだ。

「っ!」

「わっ!」

「荏舞っ!」

女の子が突然、荏舞を両手で押し込めた。力の入っていない荏舞は耐えることも無く、地面に尻もちをついてしまった。音は鈍く、絶対に痛い。

「ちよつ、大丈夫? 立てる?」

「んー、ちよつと腕かしてほしいー」

荏舞の望むまま、空いている左腕を差し出す。荏舞がわたしの腕を掴んで、互いに踏ん張つたところで立ち上

がった。制服のジャンパースカートは濡れてお亡くなりになってしまった。

「いやあーこれはやっちゃいましたなー」

「ほんとだよ……何してくれんの、つてあれ？」

「いつの間にか逃げられてしまったねー。逃げ足がはやいことだー」

「荳舞、一応被害者なのにノリが軽すぎだつて」

身体にも衣服にも大ダメージの一撃を受けたはずなのに、荳舞は憤りを見せるどころか飄々としている。やはり、この人間は正常な流れの中にいないのだろう。

「とりあえずうちに寄ってきなよ。お風呂と着替え貸すから」

「いいよーどうせ大してキョリ変わらないんだからー。

あでも、おばさんのお茶はちようだいしたいかもー」

「いらないうところで凶々しい」

「あたっ」

幼なじみどうしで家もさほど離れてはいない南原家と麻上家ではあるがそれでも多少は麻上の方が近い。

ゆえにヒトとして最低限の配慮を荳舞に心がけてみたが、逆ににやついてその配慮に付け入ってきた。すかさず前頭部に優しさのチョップをお見舞いした。

「それにしても誰だったんだろ。きようだいに傘持ってきた妹の子だったのかな。なんで……」

家に向かって歩き出すと同時に、愚痴が湧いてきて、

その上に止まらない。相容れないことが多くあるとはいえ、幼なじみが乱暴されたのだから。雨音にも負けないほどに憤怒の声を上げる。

「くるー、その予想はどうだかねー」

「えっ？ どういうこと？」

「あ、エマはおばさんの作るおかしもほしいですぞー」

「調子乗るなっ」

そんな溢れ出る愚痴に、隣の荳舞はいつもの腑抜けた様子で疑いを投げかけてきた。横顔を眺めてみても、タレ目で今にも眠てしまいそうなのには変わりないが、確かに問いかけには疑いの意が含まれていた。すぐに別の話題に切り替えられてしまい、意図を確かめることは叶わなかったが、わたしにはそれが気がかりでならなかった。

またしても荳舞は、なにかを掴み取ったのだろうか？

※

答え合わせのチャンスは想像よりもはるかに早くやって来た。

「コラッ！」

「うっ……」

翌日、同じ東門を通るルートで下校しようとするど、

女の子がまた怪しげに敷地内を伺っていたのだった。これを逃すまいと、わたしは女の子へと強引に迫った。自分でも、顔面には鬼気迫るものがあったのではないかと思ふ。

「きょうだいに傘持ってきたならそう言いなあ！この子の制服びしょびしょだったんだから！」

「きみだれが気になってるんだーい？」

「そう！ 言いたいことがあるなら正直に……って何言ってるんのっ？」

わたしが女の子の正面で問い詰めていると、背後の荳舞も声を割って入ってきた。そして何を言い出すかと思えば、『気になる人』などとまったくの想定外で度肝を抜かれた。

一度女の子を放置して荳舞と向かい合う。やはりいつもと変わらない弛んだ表情をしている。

「昨日もなにか疑ってたみたいだったけど、なんなの？」

「いやあーくるー、さすがに傘もってきた妹っていう考えはあまあまだよー。あー」

荳舞はだらしなく口を開けて何か気付いたようだった。視線の方に顔を向けると、女の子が逃亡を図っていた。

「逃げない！」

「うう……」

語気を強く女の子を制しておく。昨日の二の舞となら

ないように。そして荳舞の主張の続きに耳を傾ける。

「考えてもみてよー。きょうだいに傘をもってきたっていうやましくもなんともない理由で見知らぬエマに乱暴はたらくと思ふかねー」

「うーん……」

「それに——」

荳舞はわたしの視線を女の子の方へと誘導する。

世にも珍しいが、そのためインパクト絶大な荳舞の詠唱が始まる。

「くるは見えてなかったかもだけどねー、その子いまみたいにかばんはひとつも持ってなかったんだよー」

「それは一度家に帰ってから傘を届けに……」

「だけでも持ってた傘は自分がさしてる一本だけ……へんだとは思わないかい？」

「そうなの？ まあ……た、しかに」

目の前の女の子は、ランドセルや手提げカバンの類を持っていない手ぶらの状態だ。記憶を辿れば、昨日の女の子も同じだったような気がしないでもない。そして持っていた傘も、荳舞に言われて想起してみれば、女の子がさしていた黄色傘のみだった。

確かに、少なくともわたしの予想とは辻褄が合わない。

日常の荳舞からは想像もつかないようなペースで放たれる洞察に対して、わたしは圧倒されるのみである。やはりぼんやりとした雰囲気であるのに、いざという時の

目敏めざとさと頭の回転には目を見張るものがある。

そうなれば、女の子の不自然な挙動には荏舞の提唱する説であれば筋が通る。

「話、聞かせてよ。助けになれるかもしれないからさ」

「……いやだ」
少し屈んで、女の子が持つであろう警戒感を薄める。

それでもなお、女の子は態度を軟化させない。
「きみー」
「……なに」

「気持ちにはわからんでもないけどさー、突きとばすのはありえないよねー。ごめんなさいせずともエマたちの言うとおりにしたほうがいいんじゃない？」

ここで、荏舞ご自慢のタレ目がふるふる揺らぎ始めた。これは——いけない兆候だ。

「……いやなのはいや」

変わらず女の子は反抗。わたしは……終焉を予感した。
「はよ言えよガキ」

「ひえっっ？」

「ひい……」

語尾を伸ばすゆつたりとした話し方をすることに定評がある荏舞。しかし、あるとき沸点を超えるとそのような語尾は消え、聞き取るのもやつとなほどの低音ボイス

へと生まれ変わる。荏舞……様の低音ボイスは、普段とのギャップそして別人のような鋭い視線と相まって、荏舞様を知るも知らぬも恐怖させるに十分な威力を發揮する。わたしも力ない声と同時に、ほんの少し出た……委縮しきつた女の子と、三下のようなわたしは荏舞様の意のままに後を追うのであった。

数分間わたしを含めた三人は歩いた。そして中学校の近所にある児童公園に入って、中央に女の子、その両脇にわたしと荏舞というようにベンチへ腰掛けた。わたしたち以外には誰もおらず、尋問するには好都合だった。

「きみおなまえは何ていうのー？」

「…………」

「んー？」

「いつ、いうから！」

なおも女の子は抵抗しようとするが、荏舞を前にしては風前の灯火だった。少し押されただけで、女の子の自我は崩れていく。今はいつもと変わらぬ調子であるのに、久しく魔の荏舞を見ていなかったからかわたしですらもおぞましく感じてしまう。

「……久保島、かなみ」

「なるほどかなかなー、よろしくー」

そして荏舞は、すぐに女の子改め久保島さんの自己流呼称を確定してしまう。切り換えの速さもなんとおぞましいことかな。

「さて、どうして学校の前にいたの？」

攻撃手交代。今度はわたしが久保島さんの核心を問う。

「それはあ……」

「正直に答えた方がいいよ？ わたしの友達、これだからさ？」

荏舞に指差して、久保島さんの意識を向けさせる。荏舞に怯えながらも、わたしも荏舞の魔の部分の有効活用して口を割らせようとするあたり、本当に荏舞の手下である説が濃厚になってきた。

「……そうよ。ひとめぼれしちゃって気になってる人があの中学校にかよってるからいたのよ！」

「やっぱり……」

「いえーい麻上さんだいしゅうりー」

そしてようやく、久保島さんは口を割った。結果、荏舞の予想通りの答えが飛んできて、荏舞も満足げである。『ひとめぼれ』というワードを使ったり、おさげを豪快に振り回しながら開き直って気高い雰囲気を出そうとしたりしているが、絶妙に舌足らずで声も幼いため、久保島さんの威勢は小学生の背伸びの域を出ない。健気で愛らしい。

「それで緊張してあそこにいたら、わたしたち、というか荏舞に声をかけられたから、テンパって荏舞に八つ当たりした……そういうこと？」

「……そうよ」

核心を聞き出すことができれば、荏舞が被害を被った背景も想像に難くなかった。同性だから、久保島さんの恋に突き動かされた心情が理解できないこともない。

「気持ちにはわかるよ。でも、アレはやりすぎです。荏舞も痛かっただろうし、帰った後も大変だったんだから」

「そーだそーだー」

「ごめんなさい……」

しかし、腐っても荏舞はわたしの幼なじみであり、友達だ。敏感な恋心の捌け口にしたことに対して、お咎めなしではいられなかった。そんな心意気から、最大限の慈愛を込めつつ久保島さんを諭してみると、意外にも彼女は素直に表情をしておらせた。かなり尋問が効いているらしい。

「それじゃあ荏舞、どうする？」

「んー、まーごめんなさい言えたしこのへんにしとこー」

「りようかい」

荏舞の顔と声に現れた意思を確認。絶妙に満足げで、すでに久保島さんを許しきっているようだった。そうと決まればわたしもこれ以上事を荒立てる気はなく、久保島さんに別れを告げて荏舞と共に帰宅しようという心づ

もりだった。

「まって！」

しかし久保島さんは、わたしたちをすぐには帰してくれなかった。何かを決意したように、わたしたちを必死さが染みた声で止める。それに応じて彼女の方へと向き直る。

「あなたたち、あの中学校のひとなんでしょ……？」

「それはまあ、そうだけど」

「もしかしてエマたちでそのひとめぼれしちゃった人につなげてくれてかぁー？」

荳舞の発言には何も答えない。凶星らしい。

「なんだか凶々しいねー」

「多分荳舞が言えたことじゃないと思うけど……と、それはそれとして、一応聞いておくとその人の名前はなんて言うの？」

黙り込んでしまった久保島さんにゆるりと尋ねてみる。彼女の巻き起こした騒動には賛同できずとも、一人の女の子の恋を応援したい気持ちはある。大願成就の一端を担えるならと思つてのことであり、やぶさかではない。

「えつとたしか……まわりの人にはこぞのつてよばれた」

「えつ……ちなみに校章は何色だった？ カバンについてる」

「それは青だった！」

「ごめんなさい。今の話は無しでお願いします」

「ええええ!!」

前言を撤回。久保島さんから提供された情報を考慮して、無理を悟つた。というよりは現実味がなかった。

わたしの中学校はカバンに校章をつけることになつて、わたしのカラーは学年によって違う。わたしと荳舞、つまり二年生は赤である。そして久保島さんが目にしたという青色は三年生のカラーだ。そして、うる覚えながら彼女が口にした『こぞの』という名前。さらに女子小学生が遠目から見ただけで惚れこむほどの見た目のインパクト。その三つの属性から導き出される人物は、学校中の人気者で、あまりにもわたしとは縁遠い存在だ。

「くるー、お知りあいー？」

「そうだね、荳舞は知らないよね。わかる」

しかしその人が学校中の人気者といえど、荳舞は例外である。ネームバリューとかビジュアルというものには一切の興味を示さないから。頭上にクエスチョンが浮かびっぱなしである。

何にせよ、あまりにもその人わたしとは接点がない。

相手方は高嶺の花がすぎる。

「おねがい！ このとおりよ！」

渋るわたしに、久保島さんは最敬礼のさらにその先の誠意を見せる。何かの間違いでロックがかかってないラ

ンドセルを背負っていたら大惨事だっただろう。

しかしどれだけ頼み込まれても、深刻な様を見せつけたとしても、わたしには無理なことだと思われる。久保島さんには悪いが、拒否しようと思った。

「ごめんね、やっぱりわたしには——」

「いいよーエマたちでやったげるさー！」

「ほんと!？」

「荳舞!？」

遠慮がちに久保島さんに申し出ようとすると、またもや荳舞が割って入ってきた。その内容は、わたしの意と真つ向から反するものだった。それを仏でも宿しているかのような満面の笑みでわたしにまっすぐと言うから、わたしは呆気にとられてしまう。

「荳舞……やるのはいいけど誰が……? 荳舞だって先輩のことよく知らないでしょ……?」

「んー……」

現状を正しく認識させてみる。すると荳舞は発声こそ迷いに満ちているが、満面の笑みは少しも変わっていない。むしろ、視線はわたしの目をロックオンしている。

再びにはなるがこれは、いけない。

「くるガンバレ」

「やっぱりそうだよね知ってた！」

枠組み・常識に囚われないわたしの幼なじみ。時として彼女の目敏さと洞察力には驚かされるが、基本的には

彼女の気まぐれに振り回されるのみである。今回も、久保島さんの要望に応えようこそしたものの、具体策は思いつかず原点わたしに帰着したものと思われる。

「おねえさんたち! ありがとー！」

そんなわたしと荳舞の攻防を久保島さんはつゆ知らず、全速でわたしのそばを駆けていく。

「ちよつとまっ……!! ダメだ……」

荳舞の気まぐれ由来の誤解を解くためどうにか全速の久保島さんをせき止めようとしますが、まったく追い付かず。すぐに公園の外へと出ていつてしまった。華の中学生のはずなのに、荳舞の鈍つろさに身体が適応してしまつて身体が重い。

その次には、自然と面が荳舞のもとに向く。

「え〜まあ〜！」

「なんだかおもしろそうだったものでついー」

悪気無しと言わんばかりのすまし顔である。引っ張つてやりたい。

「もう、言い出しっぺがやってよっ」

「えーそれはめんどうさーいいいいいいいいいい」

有言実行。すまし顔から一転して気怠そうな表情の荳舞の左頬をつまんで引っ張る。激痛ではなからうと思わせる強度で。例によって醜くならず、モチ肌ゆえ可愛げ

がある。感触も良好で、腹立たしさよりも愉快的な心持ちが勝^{まさ}つてきた。

しかしモチをこねたところで現実が変わるわけでもない。久保島さんはもう音も影もなく、覚悟を決めるしかないようだった。

※

「ほんとにやるのかあ……」

「ふあいとーふあいとー、エマはうしろから応援しているぞー」

「言い出しっぺは荏舞のくせにホンマ……」

あまりに気乗りせず、生まれとはゆかりのない地域の言葉が出てきてしまう。対する荏舞は、給食のおかわりを男子たちから総取りして、満腹感ゆえまぶたが重たそうである。本能のまま生きていて何も悩みが無さそうであるのが大変憎らしい。せめてでもの報復として、寝にかかっていた荏舞を強引に三年生のフロアに連れてきた。

そうして憂鬱さと憎たらしい荏舞と戯れる昼休み。フロアのわたしたちがいる地点から廊下の端まで見渡してみる。例の先輩がどのクラスだったか、あやふやであるためひとまず階段のそばから様子を伺う。しかしほとん

どの生徒は身体を動かさしに外に出払っている昼休みである。件の小園先輩も同様か。

そのように思われたが。

「あつ、いた」

三年二組の教室から徐に目的の小園先輩が出てきた。左手に携えている小柄な巾着袋をロッカーにしまうため、教室の外に出てきたようだ。

「ほんまにいく？ それじゃレッツラゴー」

「えつ、ちよ、待つて」

様子を伺っているうちにより前に進むのが躊躇われるようになった矢先、荏舞はそんなことお構いなしにわたしの背面を両てのひらで押し付ける。抵抗も虚しく運搬される。万年脱力しているように見える荏舞だが、興味津々な事物に対しては誰をも凌駕する力を発揮するのである。興味が湧いているあたり欠片ほどだとしてもわたしを慮っているのだろうが、それにしても火のつきどころがわからない。

「荏舞っ？」

荏舞の気の向くままわたしは横すべりで移動させられる。気が付けば、先輩のすぐそばまで運ばれていた。それを認めた先輩は、咄嗟に身体の向きを変えて一言。

「どうしたの？ 俺に用かな？」

……声、いい。

清涼感があつて聞き心地の低音で放たれる紳士的な問

いかけ、長身かつ軽やかな身のこなし、極めつけは美形を絵に描いたようなくつきりとした顔立ち。ビジュアル面の完成度が高い。

「あつとと、えつと……」

あまりの完成度の高さに、それまで先輩を深く気に留めなどしていなかったわたしでさえたじろいでしまう。これは、一般的女子だったら恋に落ちても何ら不思議はない。そう確信する。

「くるちゃんにか言いたいことあるんじゃないのおう？」

しかしわたしのすぐ横に一般的女子に到底当てはまらない例外はいるが。その口ぶりではわたしが意を決しているようではないか。

荳舞の狙い通りか否か、正気を取り戻したわたしは改めて本題を切り出す。

「あのですね小園先輩、その、知り合いの女の子が先輩のこと気になっていらっしゃるんですけどね、もしよかったですら会ってあげてほしいなあ」と

「おおそうなんだね。んーどうしたもんかな……」

「あはは……」

いくら人気の高い先輩と言えど、こうも突発的に『想い人に会ってくれ』と乞うのは恐怖体験がすぎるだろう。お手本のような困惑を見せられ、わたしも苦笑を聞かせるのみである。

「いやあ小学生にも人気だなんて、せんぱいはすごいですなー」

「えつ、なんつ、小学生？」

「ああ……そうなんです、どこで見かけたのかは知りませんが」

困惑と苦笑の後のしばし流れた沈黙を荳舞が割って入った。相も変わらず腑抜けた顔の荳舞であるが、ナイスアシストである。

そして荳舞はさらに続ける。

「なかなかのシャイガールなものでねえ、いっつも人気のない東門で待ちぶせしてるんですよ。めんどーかもですけど会いにいつてやってくれませんか？」

「ああ……うん、そうだねそうさせてもらうよ」

「ふう…………」

とんとん拍子で事は進み、傍観している間に解決へ辿り着いてしまった。安堵の気持ちから思わず吐息が漏れる。

「それにしても、ふたりとも教えてくれてありがとう。

名前はなんていうの？」

「ああえつとお……わたしは麻上来未っていいます、二年三組の」

「くるとおなじく三組の南原エマでございます」

「そうかそうか。くるみちやんとえまちゃん、わざわざありがとう！」

こちらへ視線まっすぐにそう言って、先輩は教室へ戻っていった。心なしか、教室から出てきたときよりも足取りが軽やかに思われた。

「はああああああ……ムダに緊張しちゃった」

「おっおっ。まあほとんどエマ様のコミュ力のタマモノだけだねー」

「はいはいありがとありがと」

「感謝のいろがみえーん」

にじり寄る荇舞を手で払いつつ、彼女の自己肯定感も雑にあしらう。傍から見れば日頃と変わらないようにも見えるだろうが、結果的に役目を代わってくれた荇舞にはリアクションに表している以上の感謝をしている、つもりだ。

「まああととはかなみちちゃんのがんばり次第だね。はあ……なんとか終わってよかった……」

「はてさてーそれはどうかかなー」

「えっ？」

「あっ、五時間目の時間だー」

「えっ、あっ……ええ〜？」

久保島さんの健闘を祈るわたしの何気ない一言に、これまで何気ないような雰囲気で突っかかってくる荇舞。数日前にも似たような光景をわたしは目の当たりにしている。なにかに、荇舞は感づいたらしい。

「国語か……こりゃシエスタの時間ですなあー」

しかし荇舞は、やはり教えてくれない、はぐらかす。その甘く優しい瞳の奥では、何を見透かしているのか。そしてそれを、なぜすぐにはわたしに示してくれないのか。

わからない。フラフラと歩く荇舞の後追いをするのみである。

「ほんじゃー先に帰っててよくるちゃーん」

放課後のチャイムが鳴ると同時に、荇舞はそう言い残して教室を出ていった。珍しく、機敏な動きを見せていた。ゆったりとした口調とは正反対に。

荇舞には先を行かれ、早く帰宅する理由もなくなったわたしは、掃除当番を鈍重にこなして、うれしくも悲しくもない何とも言えない気分で校舎を出た。荇舞に思考を隠されていて釈然としないからということもあるだろうが、それ以上に『横にだれもない』という事実がわたしにとっては理由として大きかった。今のように時として決定的に分かり合えないことがあっても、生まれて以来の幼なじみのつながりは直感が求めてしまうようだ。自分でも少々気色悪い。

「あっ……」

ここ数日、何かと事件が起こっている東門。一人で帰る今日も通過しようとする、見覚えのある人物が二名。

件の久保島さんと、小園先輩である。おそらく始まるであらう恋模様を前にして、反射的に物陰に息を潜めた。

「行こうか……」

かすかに届いた先輩の声。それを合図に二人は門をくぐり抜けた。

趣味は悪いだろう。だが、気になってしまった。いくら残りも久保島さんのアプローチ次第と割り切ったとはいえ、恋の行く末を追ってみたいくなってしまうのも女性の性。一定距離を保って追跡してみる。

最初はなんてことない、少し身長差が目立つ男子中学生と小学生の女の子が、横並びで歩きつつ談笑に浸るほほえましい光景しか見えてこなかった。恋が成就するかと問われると、その答えは限りなくノーとしか言えないが、間違いなくこの瞬間は久保島さんにとつて意義深いものになるであろうと思われる。晴れ空にきらめく焼けるようなオレンジ色も相まって、ロマンティックな雰囲気も完成している。

しかしそのような晴れ空は、急変しやすいものであると身をもつて痛感させられる。

思考停止で二人の後を追いかけていたが、やがて通学路を外れ、廃屋が立ち並ぶ人気の薄いところに誘われていた。なにをするつもりなのだろうと気がかりに感じていると二人も歩みをピタリと止めていた。

そしてわたしがその次に見たものは……あまりにもシヨッキングが過ぎた。

「キヤアッ！」

「えっ!! ちよ、なんで!!」

先輩は左隣の久保島さんに視線を送ったかと思えば：久保島さんの全身をホールドして、横方向にスライドし、倉庫と見える廃屋に連れ込んでいったのだった。久保島さんはジタバタと反抗策を取るものの、体格で分がある先輩は易々と引きずってしまう。似たようなことは荏舞にやらないこともないが、事件性がまるで違う……!!

久保島さんが強引に連れ込まれた扉のもとへ駆け寄る。扉はどこどころ破損して中を伺えるようになっていた。当然、二人の様子も目にする事ができる……

「あはっ……ははっ……いいねいいよ……」

久保島さんと先輩は室内で向かい合っていた。先輩は気味の悪い吐息を聞かせ、久保島さんは後ずさる形である。久保島さんの表情は、恐怖で歪み今にも泣きだしそうである。

——怖い

わたしも、おそらく久保島さんと気持ちは同じである。様変わりした先輩を見てみると、足がすくんでしまう。寒気すら感じる。できることなら逃げたい。

だが、久保島さんを見捨ててはいけけない。わずかな良

心がわたしを突き動かす。

「やめて……！」

「は？」

「お、おねえさん……？」

意識したとほとんど同時に、破れかけのドアに体当たりをして開いた。当然その勢いで中にいる先輩と久保島さんはわたしの存在に気付いた。久保島さんの反応からはわたしを不思議に思う感情と同時に、わずかに安堵の感情が見えた。そして、小園先輩といえは……

「かなみちゃんからすぐに離れてください……はやく！」

「うるせえババア！」

「バ………はっ？」

美少年たる顔立ちは姿を消し、全面に怒りを滲ませていた。なにより『ババア』という罵倒に対してわたしは理解が追いつかない。

「やっぱりい、サイアクなロリコンやろーでしたねー」

「あっ………狂舞っ！」

そんな中、学校で別れた狂舞と数十分ぶりに再会を果たす。「えへへー」と後頭部を掻きながらヘラヘラと登場した狂舞に、ほんの少しの憤りを抱きつつも、この上ない安心感を覚えた。

「とういか狂舞、ロリコンってどういう」

「こぞのせんばいでしたっけー。パイセン的にはロッカーの中うまくかくしてたつもりでしょーけど、エマには

ムダってことですよー」

「だから狂舞、それって……」

わたしの問いかけを最後まで聞くことなく、狂舞はいつだったかのように詠唱を始めようとする。しかしなにもわたしが食い下がるためか、狂舞はわたしを納得させるべく動く。

狂舞が差し出したのは、三枚のスナップ写真である。

「これって……」

「おいテメエ！俺の秘蔵をなにしてくれんだ！」

「この写真撮っちゃうよりはマシだと思えますがねー」

写真に映っていたのは……盗撮された女子小学生の姿であった。どれも下のアングルから撮影されている。気持ち悪い。

「それ全部そのどヘンタイさんのロッカーのなかに貼ってあったやつだよー。エマはみのがさなかったー」

思い返せば、わたしたちと先輩が出会ったとき、先輩は機敏な動きを見せていた。そのときは特に気にも留めなかったが、……防御の体勢をとったわけだ。

「しかも盗み撮りじゃあきたりず今かなかなにやろうとしたみたいに手も出してしまったわけだー。いやあー罪を重ねますなせんばいー」

「えっ」

「えっ？」

狂舞が続けて放った言霊に、わたしはさらに理解が追

いつかなくて間抜けと化した。

「ええーやだなあ優等生くるー。最近よく不審者の話されるじゃーん」

「うん……」

「ホームルームできた連絡は三回でロッカーにあったそれも一人ずつ映って三枚でクロ確定じゃーん」

「クソ……」

最後は、詭弁と言えるのかもしれない。しかしながら、久保島さんを手にかけてしようとした事実がある以上、荏舞の推論は真実であると言いか言いようがない。小園先輩のリアクションもそれを物語っている。立ち尽くす先輩を尻目に、危機にさらされている久保島さんを抱いて保護する。

「まさかと思ってさつきばあーつとかなかなのこと言っ泳がせましたけどまんまと釣られましたねー」

そこへ荏舞は煽りという形で追撃。これは……いけない。

「お前らババアのくせしてナメやがって……」

もはや声色にも目元にも、整いきれいな先輩の面影はなかった。それどころか、怒りのあまり握りこぶしを上げる様は、小物と言わざるを得なかった。

「おーこわこわー。ちゅーことでひーくん来てー」

「おう荏舞！ 来末ちゃん！ 待たせたな！」

「ひ、弥さん？」

荏舞の呼び込みに応じて飛び込んできたのは、篤哉さん——荏舞のお兄さんの幼なじみであるところの弥さんである。

「覚悟！」

そのつぎ弥さんは、鬼の形相をした小園先輩に待ったなしで飛びついた。いや、飛びついたというよりはラグビーとかアメフトとかで行われる見るからに重たそうなタックルで取り押さえたのだった。

「あぐう！」

弥さんの全身によつてなぎ倒された先輩のやられっぷり、みつともないと同時に、とても清々しいと思つた。純真な小学生を手にかけてしようとして、あまつさえわたしや荏舞をババア呼ばわりした代償としてちようどいい。

「それじゃああととは任せたぜ二人とも。オラア！ 行くぞ！」

小園先輩から抵抗するだけの体力を吸い取ったところで、弥さんは警察官よろしく羽交い締めにして連行していった。当の小園先輩は……暗い表情でうなだれて、何も言う気はなさそうであった。

「さて……かなみちゃん、ケガはない？」

「だい、じょぶ……」

こちらは傷心のようにある。下にうつむいていて、受け答えも臆気である。想い人がアレだったのだから、傷心も当然ではあるが。いや……

「ねえ、荳舞」

「なんだーいくるー？」

「さつき先輩に、『泳がした』って言ってたけど、こうなることは予想してたの？」

「うーん」

思い返せば、わたしがありがたみを感じた荳舞のナイアシストも、騒動の引き金となったことは理解に難くない。もし荳舞のアシストが無ければ今回の騒動が巻き起こることも、久保島さんが傷心することもなかった。

荳舞がご自慢の洞察力によってこの事態を見越していたとしたら……わたしは心穏やかではいられない。

「してたっちゃーしてたかなー」

「そんなのって……」

「だつてさー」

荳舞はわたしの右隣の久保島さんに視線を移す。

「恋に盲目かなかなに『先輩、バリキシヨロリコンかもしれへんでー？』って言ったところで信じないでしょー。ちよつと痛い目見ても男の人のみかたを知ってほしくてー」

「だからってやり方つてものがあるでしょ！ 危なすぎる！」

「それにー」

さらに荳舞は、屈んで目線の高さを久保島さんに合わせる。荳舞は目元にやや力を込めている。

「エマをふつ飛ばしたお礼参り、の意味もあるのさー。

これでわかったかーい？ エマちゃんのおそろしさかー」

「……ごめんなさい、ごめんなさい……」

「わかればよかるーなのだよーわかればー」

やはり、荳舞は恐ろしい。彼女自身が言う通り。久保島さんも、昨日見た気高そうな雰囲気はなく、うつむいたまま平謝りをするのみである。声は今にも泣きそうなほど潤んでいる。

荳舞の言うことに一理はあるのかもしれない。だが納得しているわけじゃない。

「それでも、やつぱり危ないよ、荳舞。わたしがたまたまいたから少し時間が稼げたけど、いなかったら……」

「それはあねとーねーくるー」

なおも荳舞はわたしの懸念を理解していないようである。深刻さが彼女から見えてこないほど、荳舞は身も心も軽い。

「こんなことになりそうって分かったなら、わたしにも教えといてよ」

「いやあーそれはできませんなー」

「えっ……?」

屈んでいたところから「よいしょー」と気怠そうにつぶやきながら荇舞が立ち上がる。今度はわたしに視線を移してきた。

「あくまでも事件は泳がせたエマが引き起こしたわけですよー。なのに事件発生に関係ないくもまきこむのはですねー、わたしがゆるしませんぞー。なにせたいせつなたいせつなお友達なのでねー」

「なっ」

そして荇舞は、淀みなくまっすぐに、モチ肌が生み出すいつもの緩い笑みを浮かべながらそう告げる。

たいせつなたいせつなお友達。

わたしはその言葉を自ずと頭の中で反芻させていた。

衝撃として、心に留まったらしい……

「ま、手柄をひとりじめにしたってのもあるけどねーはっはっはー」

「そう……」

これは付け足しの言葉だ。わたしはそう確信している。荇舞も、ちょっとは恥じらうを感じたのだらうか。本心がほとんど見えてこない荇舞だから、真実は知り得ないが。

「さてー、学校に報告行きますかー」
「うん。かなみちゃんも行くよ」

こうして、ひとりの女子小学生の恋模様からはじまった大騒動は、一応の終わりを迎えたのであった。ひとりの女の子には若干の心の傷も残ったが。荇舞の言う通り、人生勉強のための痛みだと思ってもらうほかないのだからと思う。

それでもやはり、わたしの心のモヤはどうにも昇華できなさそうだった。

荇舞は、どこか危なっかしい。

こうして彼女の洞察力によって大小はあれど事件が解決されたことは初めてじゃない。ある意味では信頼の置ける人物だ。

だが、今回犯人を泳がせたり久保島さんを囮として利用したりしたように、なにかと不安定な橋を渡りたがる。

まだ、赤の他人がその橋から落ちるのはいい。だけれど、荇舞本人が万が一にも橋から落ちてしまうということがあったら、幼なじみとして、わたしは……

そういうわけで、わたしは荇舞の洞察力が発揮されるのであれば、いつでもどこでも、彼女を追いかける。どんなにマイペースで粹にとらわれない生き方をしていようと、わたしは彼女を見捨てない。